

博士（人間科学）学位論文 概要書

テキストを用いた学習場面における
下線ひき行動の役割と有効性の検討

Roles and Effectiveness of Underlining
in Text Reading

2004年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

魚崎 祐子

Uosaki, Yuko

研究指導教員： 野嶋 栄一郎 教授

今日の学習活動では、何を学習したかということだけではなく、どのように学習したかという過程についても重視されるようになってきており、学習者自身による能動的な学習が求められるようになってきている。我々は何かを学習する際、その効果を高めようとして様々な行動をとるが、それらの多くは明確な目的なく用いられており、その行動の中に方略としてどのような役割が存在するのかといった吟味は十分に行われていない。そのために必ずしも効果的な利用につながっていないのが現実である。そこで本研究では、テキストを用いた学習場面においてとられる行動の役割や有効性および関わる要因について明らかにすることを目的とし、「下線をひく」という行動を一例として、教授者によってあらかじめつけられた下線強調（プロンプト）との比較という観点から実験的検討を行った。

まず、比較的容易に読むことができると考えられるテキストを用いて、大学生の下線引き行動の現状について把握し、その効果に影響を及ぼす要因について探るための実験を行った。その結果、多くの学習者が実際に下線をひくということが明らかになったものの、その行動が読解成績を高めるというわけではなかった。また、行動の効果に関わる要因として、再生時期の違い、読解時間の長さ、素材の難易度、学習者集団の違いが考えられた。そこで、これらの要因による影響について検討するための実験を行った。

その結果、これらの要因や下線の有無に関わらず、テキスト中の重要度の高い情報はそれ以外の情報に比べて再生されやすいということが明らかになったことから、テキスト読解において、重要な情報を探し、選び出すという過程が大きな役割を果たしていると考えられた。また、それぞれの要因による影響として以下のことが明らかになった。

(1) 再生時期の違い

学習者自身の下線引き行動やテキストにつけられたプロンプトによる効果が大きいのは読解直後であり、その後の保持にはそれを超えるような効果は見られなかった。したがって、これらの下線の役割について考える際には情報入力時におけるものを中心として捉えるべきであると考えられた。

(2) 読解時間の長さ

短い読解時間の中で下線をひきながら読むことは、読む作業そのものにかかる時間を削ってしまうために不利に働くということがわかった。また、読解時間を多くかけることによって、内容の獲得と結びつくようになってくるものの、下線をひかない場合に比べて有効な方略であるとは考えられなかった。一方、プロンプトは、獲得すべき情報を視覚的に知らせ

ることができるために、読解時間に制限がある場合に有効であるということがわかった。また、プロンプトの存在は短時間で多くの情報を獲得することを助けるが、あまりにも読解時間が短い場合には、プロンプトという補助があったとしても、効果をもたらすことができないということも示された。

(3) 素材の難易度

単純素材の読解では、プロンプトの存在によって強調部分であるキーワードの再生を高めるという効果が見られたが、学習者自身が下線をひくことによる効果は見られなかった。それに対し複雑素材の場合には、学習者自身が下線をひくこともプロンプトと同様に、重要な情報の再生を高めるということが明らかになった。この理由として、複雑素材の場合には重要な情報を探索・選択する過程が重要であり、視覚的に強調する下線の存在がこの過程を助けているからだと考えられた。

(4) 学習者集団の違い

四年制大学と短期大学における実験結果を比較することにより、学習者集団の違いによる影響について検討した。その結果、短期大学の学生は下線引き行動をとる割合が低く、下線引き行動をとる学生はとらない学生よりも高い成績を示した。これは、読解に際して方略をもっている学生が、重要な情報を選び出すことに長けているからだと考えられた。また、プロンプトの存在によって、強調部分の情報の再生は高められたが、それ以外の情報の獲得に対する効果は学習者の能力によって異なるということがわかった。読解速度の速い学習者の場合には下線部以外の情報の獲得に対する影響はないが、読解速度の遅い学習者の場合には、十分な時間がなければ下線部以外の情報獲得を阻害するという負の効果をもつということが明らかになった。

以上のように、それぞれの要因は、学習者の下線引き行動やテキストのプロンプトによる効果に影響を与えており、学習時間の長さや素材の難易度などの要因が組み合わさることによって、学習場面における行動の有効性を決定しているということがわかった。このように、本研究で検討したのは学習行動の一例ではあるが、学習行動の役割について検討する際には、このような要因との関係の中で捉えることにより、方略としての有効性が明らかになり、学習者の活動を支援することができると考えられた。